宮操子の動きの理論『動の美』の［基本Ⅰ］についての考察

堀切敍子

【序】 宮操子（みや・みさこ）は、その著『動の美』（どうのび・1997・リーベル出版）の中で、『人間は、偉大なる自然の前にすべて無力である』との考えに立ち、「光と闇」、「天と地」などのように、二つの相反するものの調和によって成り立っている自然から、［正］（せい）・［反］（はん）という動きを導き出し、『動の美』という動きの理論を述べている。その核になるものが、「三つの基本」である。それを、対になる明確な3方向［前後・左右・上下］とそれぞれの［斜め］方向そして腕と脚の関係を基に構成している。

ここで、［正］の関係とは、からだのある部分と他の部分が［前後・左右・上下］方向やその各方向を区分する［冠状縫合面・矢状縫合面・水平面］に対して反対方向に動くこと、または、ある面に対して反対側のからだのある部分と他の部分が同方向または反対方向に動くことであり、［反］の関係とは、からだの同側にある部分と他の部分が同方向に動くことである。

「三つの基本」は、『立っている自然な状態から動きを研究』したもので、『無限に発展していく動きの展開への入口であり、あらゆるすべての動きはここに還ってくる』と考えられている。そして、この『「三つの基本」は、動きの「ふるさと」』であるという表現がなされている。本報告では、そのうちの［基本Ⅰ］について考察する。

【本論】 ［基本Ⅰ］は、［歩く］という動きから創造され、片腕と片脚との関係から成っており、足の運びの連続が16歩に納められている。その16歩の中に、［前］と［後ろ］（1～4歩）、［右］と［左］（5～8歩）、［左斜め前］と［右斜め前］（9～12歩）、［左斜め後ろ］と［右斜め後ろ］（13～16歩）の8方向が組み合わされ（右足から前へ［歩く］という原形の場合）、特に斜め4方向の配置が16歩の流れに動きの妙味を作っている。［基本Ⅰ］はこの原形の他に、左足から前へ［歩く］―②、右足から後ろへ［歩く］―③、左足から後ろへ［歩く］―④という3種があり、4種すべてを動くこと、［斜め］方向への足（脚）の出し方のもう1種を動くことで、からだの均等な方向感覚を知覚させる構造をもっている。［基本Ⅰ］での、片腕と片脚の［正］の関係とは、日常の［歩く］時の片腕と片脚の関係を言い、［反］の関係とは、同側の片腕と片脚が同時に同方向に出る関係である。そして、［正］・［反］の動き双方を等価値において動くことが重要であると考えられており、実際に体験することによって、からだの動きに自由闊達さが増すことが理解できる。つまり、［基本Ⅰ］とは、型にとらわれない「動けるからだ」を造る基を成す一つと考えられる。さらに、個々人の舞踊創作の見えない土台である動きを生み出す基でもあると考えられる。

そして、『すべて動きを会得するには段階を意識して大事にすることが大切』であると述べられ、小さい動きから大きい動きへ、または、緩やかな動きから徐々に速い動きへなどと移行し、最終的には個々人の極限まで動いてみることを提案している。従って、［基本Ⅰ］の動きも、1段階「小さい動き」、2段階「中くらいの動き」、3段階「大きい動き」と段階を経て記述、図示され、動きの量が変わることで、同じ動きがこの様に変化するのかという発見と感動をもたらすものである。

この［基本Ⅰ］の動きの実践は人々の舞踊への入門にも大きな役割を担うものであり、舞踊経験を積んだ人々にとっても、からだの調整と動きのさらなる発見と発展をもたらすものと考える。

また、『動の美』の中では、『すべて新しい発見には、必ず「芽」』があり、『「からだ」の仕組みを考えて、何が「動きの基」になるのかを探すことが大切』であるとも述べられており、『動きの「芽」を発見し、「芽」～「茎」～「葉」～「蕾」～「花」へと開花発展させ』、『探求心をもって、楽しみながら動くことが大切』であるとも述べられている。その考えに立つと、この［基本Ⅰ］の16歩もまさに『動きの「芽」』であることが読み取れ、ここから様々な動きの発展を見据えることが可能である。

例えば、その16歩の中から、1～4歩の［前後］方向のみを取り出して、歩数を増やして連続して動いてみると、前に［歩く］、後ろに［歩く］ことの様々な変化を見つけることができ、［回る］、［跳ぶ］、動きの質の変化などを加えるとさらに動きが増幅し、動きの容量が増すことが「からだの自然」を基に体得できる。そして、5～8歩の［左右］方向、9～16歩の［斜め］方向（稲妻型に連続して［歩く］）も同様に様々に変化し、そこに個々人の特性を発揮でき、舞踊創作をさらにゆたかなものに育むことができるのである。

【結】 宮操子は『動の美』の中で、『舞踊は残るものは何もありません。その瞬間の芸術であり、……』と述べている。そして、そのはかない命の舞踊に魅せられた人々を愛し、『自然から贈られた「動きの基」』を通して、『あなた自身の舞踊に燃え尽きる』のだという舞踊創造への限りない愛を行間に潜ませながら、個々人の舞踊が誕生することを切望し、作品になった時には見えなくなるこの「三つの基本」の意義を全章を通して語っているのである。